幼稚園・保育園

保育を変える！幼児教育アドバイザー ▶7◀

研修で「子どもの学び」を学ぶ

勝山市では「自然を愛しのびのびと遊ぶかつやまっ子」を保育目標とし、子どもが自らさまざまな環境と関わり、主体的に遊びや活動を発展させていくことを大切にしている。

市全体に公立・私立や保育園・幼稚園という枠による隔たりはなく、幼児教育推進委員会を開催したり、園同士で連絡を取り合って園児交流を行ったり、小学校との交流を進めたりしているところもある。また、毎年順番に二つの園が公開保育を行い、参観後には意見交換会を実施している。

市町幼児教育アドバイザー養成研修を受けて「子どもの学び」を学んだことで、自分の意識が変わっていくことを感じた。「この子は今、何を感じているのか」「次は、こうしたらどうだろう」「今の姿も学びだな」など、今まで以上に子どもの姿をじっくり見詰めるようになった。

さらに、この研修で学んだことを伝えたり、研修に関連したことをもっと深めていったりと、「アドバイザーとしてできることは何だろう」と考えるようにもなった。

参観のポイントを絞ったグループ討議

養成研修の一環でもある自市での研修会開催は毎年実施している公開保育と兼ね、内容の充実を図った。参観のポイントとして五つの視点を設定し、それに基づいた意見を参加者に付箋に記入してもらう。意見交換会にそれを持ち寄り、園内リーダーのファシリテートによるグループ討議を行った。

同じ保育にも多様な見方があることを知り、たくさんの「子どもの学び」を共有することができた成果があった。一方で、もっと多くの先生方に参加していただきたいという反省点もあった。

また、研修で作成したポスターを、市の保幼小接続協議会で紹介することも行った。小学校教諭（低学年）と5歳児担当保育士に向けて、ポスターを使い「子どもの学び」について話すことで、伝わりにくかった部分を伝えられたと実感した。

そして、園での生活やさまざまな活動から学んでいる姿を実際に見てもらうことが幼児理解を深めてもらうことにつながると考え、小学校教諭に「公開保育」への参加もお願いした。

1年の研修を経験し、「子どもの学び」を保護者に発信する方法を考えること▽各園で「子どもの学びを見取る演習」を行い職員間の共通理解を深めていくこと▽保幼小の職員間の相互理解を深め「公開保育」への参加や園訪問の実施を気軽に行えるような関係性を築いていくこと―などの実現を願っている。

福井・勝山市市町幼児教育アドバイザー
漆屋　満里江（公立平泉寺保育園園長）

次回は8月7・14日付掲載

新教育・保育要領、指針で中央説明会

改訂・改定部分のポイントを解説

＜上＞

10日にスタートした、内閣府・文科省・厚労省3府省合同の新幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の中央説明会。解説書の基になる資料を使って改訂・改定のポイントを解説した園種別の分科会のうち、第1分科会では新幼保連携型認定こども園教育・保育要領について説明した。新要領・指針は整合性を図っており、改訂・改定内容の多くが共通している。第1分科会から、要領・指針の共通部分を中心に改訂・改定された部分の解説内容を2回にわたって紹介する。（1面に本記）

10日にスタートした、3府省合同中央説明会の様子

発達の実情踏まえて活動全体で一体的に

教育・保育において育みたい資質・能力

園生活全体を通して、園児の生きる力の基礎を育むことが重要。教育・保育の基本を踏まえ、園の教育・保育によって「育みたい資質・能力」を育てることが大切となる。

「育みたい資質・能力」は「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力の基礎」「学びに向かう力、人間性等」の三つ。個別に取り出して指導するものではなく、「ねらい及び内容」（5領域）に基づき各園が園児の発達の実情や興味・関心などを踏まえながら展開する活動全体によって、一体的に育んでいく。

各園は、実践の中で見えた園児の具体的な姿からあらためて「育みたい資質・能力」を捉え、全体的な計画（幼稚園は教育課程）の作成を図る。

自発的な遊び通し　一人一人の特性に応じて育つ

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は「ねらい及び内容」（5領域）に基づき、各園で乳幼児期にふさわしい遊びや生活を積み重ねることによって「育みたい資質・能力」が育っている園児の具体的な姿。特に、5歳児後半に見られるようになる姿である。

こうした姿は、遊びの中で園児が発達していく姿を念頭に置いて捉える。指導を行う際には、一人一人の発達に必要な体験が得られるような状況をつくったり、必要な援助を行ったりすることなどを考慮する。

この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、到達すべき目標ではなく、個別に取り出されて指導するものでもない。自発的な活動としての遊びを通して園児一人一人の特性に応じて育っていくものであり、園児全員に同じように見られるものではない。

また、5歳児に突然見られるようになるものではないため、0歳から4歳までのそれぞれの時期から園児が発達していく方向を意識し、ふさわしい指導を積み重ねていくことが重要となる。

小学校の教員と共有する際には、「保育者が適切に関わる事で、特に園生活の中で見られるようになる園児の姿」であることを留意する必要がある。

具体的な「育ってほしい姿」の内容

10項目を共通した構成の5段落で記述

資料（解説書の基になる）に書かれた「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目の内容は、共通した構成の5段落で示している。これを基にしながら、各園における生活全体の中で「『育ってほしい姿』が示す方向に育っているか」を見ていく。

「自立心」を例にすると、第1段落で「保育者との信頼関係を基盤に自己を発揮し、身近な環境に主体的に関わり、自分の力でさまざまな活動に取り組む中で育まれる」「領域『人間関係』だけでなく、『ねらい及び内容』（5領域）に基づく活動全体を通して育まれる」ことを記述。

第2段落では、「自分でしなければならないことを自覚するようになる」「難しいことでも自分の力でやってみようとして、考えたり、工夫したりしながら、あきらめずにやり遂げる体験を通して達成感を味わい、自信を持って行動するようになる」と、5歳児後半に見られるようになる姿を明確化している。

第3段落では、「生き物の世話などの当番の日は、片付けを早めに済ませて当番活動をする」など、第2段落で明確化された姿が育っている具体的な事例を紹介。「やりたいことを自分で選んで行動し、少し難しいと思うこともやってできた満足感を味わうなどの体験の積み重ねの中で育まれる」という留意点も記している。

第4段落では、「その日に必要なことを園児全員が分かりやすいように、視覚的に提示する」「園児一人一人の良さが友達に伝わるように認めたり、学級全体の中で認め合える機会を作ったりする」など、保育者に求められる工夫を例示。

第5段落では、幼児期に育まれた自立心が、「できることは自分でしようと積極的に取り組む姿」「生活や学習での課題を自分のこととして受け止めて意欲的に取り組む姿」「自分なりに考えて意見を言ったり、分からないことや難しいことは教員や友達に聞きながら粘り強く取り組んだりする姿」など、小学校生活を楽しく充実させる姿につながることを示している。

3面に関連記事　解説　幼稚園による2歳児の受け入れ促進

続　保育のこころもち　▶99

園庭にそよぐ風

秋田　喜代美
東京大学大学院教授

ポルトガルに出張した際、50年以上の伝統を持つ民営保育所を参観した。子どもたちの自由感があふれる園であり、その自由感はどこから来るのかと考えさせられた。

男性の保育者がギターを弾き、子どもたちが楽器を使いながら歌を聞かせてくれた。

美しく暮らすたたずまいを保障したい

来客があるからと特別に練習して完成させた作品を見せるのではなく、皆が歌を歌うことを楽しみに、心地よく子どもたちが楽しんでいる姿が伝わってきた。

園庭に出ると、自然が豊かなだけでなく、木の切り株や枝を使って子どもたちが遊べるようになっている。風鈴のような物や何本か組み合わせた枝に毛糸を巻きつけた飾りなど、子どもが作ったであろうものが木にぶら下げられていたことが印象深かった。

園庭に面した部屋の窓辺には、紙で作った風車が飾られていた。風のそよぎとともに風車が回り、窓から風が入ってきた。

そうした様子からは、園庭や窓辺などの環境を共に構成する一員として、子どもたちが関わった軌跡が見えてくる。だからこそ、子どもたちは、こうした暮らしの場を大事に使っている。

子どもたちの制作を支援する専門のアーティストが関わっており、ホールには子どもたちのコラージュの作品が飾られていた。幼児が作ったとは思えないような、立体なども組み合わせたポップな作品だった。そこにある丸い柱には、子どもたちがぶつかっても痛くないようにと、保育者が編んだと思われる毛糸のカバーが巻かれていた。

この園には、美しく暮らすたたずまいがあちらこちらにあった。暮らしの場にある伝統と文化を、私たち日本の園は四季の中でどのように保障しているか。そう振り返った園訪問だった。

次回は８月７・14日付掲載

ニュースBOX

義足アスリートとの交流通じ多様性を学ぶ

小学校でスポーツ義足体験授業

全国各地でオリ・パラ教育が注目を集めるなか、東京2020公認教育プログラムである㈱LIXILの「ユニバーサル・ランスポーツ義足体験授業」が4月より全国の小中学校を対象にスタートした。同プログラムは、国内義足メーカーと同社が提携し、小学5年生から中学生に向けて行われている体験型授業。児童・生徒が健常者用の義足を装着して歩行・走行体験を行うほか、座学でユニバーサルデザインなどについて学ぶ。

千葉県佐倉市立印南小学校で先月19日、5年生と6年生の児童約80名を対象に同プログラムの出張授業が行われた。リオ2016パラリンピックで銅メダルを獲得した義足アスリートの佐藤圭太選手が講師として参加。児童たちは、体験会での普段会うことが少ない義足ユーザーとの触れ合いを通じ自分の知らない世界を体感した。

また、座学では義足の種類や値段、使用している人の数などの情報だけでなく、生活する上での困りごとなど義足選手の体験談も。視野を広げるという点ではそれだけではない。義足に関して日本は技術が進んでいること、紛争地域では地雷などの被害で義足が必要な人が多いことなどグローバルな視点で考えさせる内容も東京2020大会に向けた次代の育成に欠かせない要素だ。

「2020年までに2020時限の実施」を目標に推進されている同プログラムをはじめLIXILでは、年齢、性別、国籍、性的指向、言語、障害の有無などに関係なく、誰もが暮らしやすいユニバーサル社会の実現を目指して様々な活動を実施している。

講師の佐藤選手の話を真剣に聞く児童

■LIXIL　東京2020オリンピック・パラリンピック推進本部
■問い合わせ＝03・6273・3256

命の大切さを考える失明した犬を介して

ワンコレクションが特別授業

NPO法人ワンコレクション（東京都渋谷区、道躰雄一郎代表理事）は、6月26日、成蹊小学校の6年生を対象に特別授業「動物の授業」を行った。

海老原さんの愛犬かえと触れ合う子どもたち

同法人では、小学校で課外活動・学童保育の一環として、子どもたちに色々な体験をしてもらう特別授業を企画運営。「動物の授業」では、実際に犬との触れ合いを通じて、接し方や子どもたちに命の大切さを伝える活動を行っている。

「普段は小学校で教える機会が多いのですが、今回はPTA主導の会に取り入れていただきました」と道躰氏は説明する。

授業は、この活動を支援するアイペット損害保険（東京都港区、山村鉄平代表取締役）の会議室で行われた。

まずは、山村鉄平代表取締役が挨拶し、「会社の経営理念の一つにペットとの共生環境の向上を掲げている。こうした活動への支援を通じて、人間もペットも幸せに生きていける社会になれば」と話した。

授業は、ドッグパートナーの海老原ゆかりさんとその愛犬・かえが講師役となり、犬の抱き方や触り方、犬が触られると気持ちのいい箇所などを、実際にかえをモデルにしながら試したり、ワークシートで確認しながら進めた。普段、犬に触れる機会が少ない子どもたちも多く、おっかなびっくりしながら触れる姿も見られた。

次に、盲導犬や災害救助犬、警察犬など使役犬としての犬の役割を紹介。高齢者の介護まで犬が手助けしていることには驚きの声も聞かれた。

授業の最後には、海老原さんが愛犬・かえが6ヶ月のときに失明した犬であることを告白。今でも散歩が怖かったり、物音にびっくりしたり、急に触わると驚いたりするところがあるものの、「二人ともとても楽しく過ごすことができている」と話し、前向きに生きることの大切さを訴えた。

■ワンコレクション http://www.onecollection.org/

福島県・広野町が受賞

2017年童謡文化賞

童謡の町づくりを評価

受賞を喜ぶ遠藤智・広野町長

日本童謡協会は6月30日、都内で第47回日本童謡賞と2017年童謡文化賞の贈呈式を行った。

日本童謡賞は子どもの歌の振興を図るために制定され、優れた作品とその作者に贈られる。今年は該当者なしで、同・新人賞に大楠翠「おにいちゃんの紙飛行機」（銀の鈴社）が選ばれた。

大楠氏にとって初めての詩集で、表題にもなった「おにいちゃんの紙飛行機」は、おにいちゃんが折る紙飛行機と自分が折る紙飛行機の違いに視点に当て、ほどいて確かめたいという子どもの気持ちを歌った。

大楠氏は「詩作は自分と向き合う作業でとき苦しみもあるが、完成したときの喜びは何者にも代えがたい。これからも詩を好きな気持ちを大切に、日常の何気ない出来事から、読者の気持ちが温まる詩を作れたら」と喜びを語った。

このほか、同・特別賞は、岡山県を中心に地域童謡文化の普及振興に努める「とっくんこの会」、童謡・唱歌による日本語の美しさを表現する活動を行う「ことのみ児童合唱団」、「心のふるさと杉並童謡・唱歌」まつりを企画する「NPO杉並文化村」に贈られた。

また、東京書籍の協賛で、童謡文化の普及発展に寄与した個人・団体に贈られる「童謡文化賞」は、福島県・広野町に決まった。

広野町は唱歌「汽車」のゆかりの地と言われ、童謡「とんぼのめがね」の作詞者・額賀誠志が内科医院を開業していた地である。

1994年以来「豊かな心を育む交流と文化のまちづくり」として、童謡の振興と世代を越えて歌い継がれる新しい童謡の創造を目指した町づくりに取組み、「ひろの童謡まつり」を開催。これまでに28曲もの新作童謡が誕生している。

受賞の挨拶に立った遠藤智・広野町長は「多くの人の支えがあって今回の受賞につながった。改めて感謝したい」と話し、「童謡まつりを大切にして、未来に向けて長く続けていければ」と抱負を述べた。